

JIRON
KOHRON

IV

強力なカリスマ性で日産を再生
ゴーン氏の「次の一手」

国際アーティスト



2016年三菱自を事実上傘下に。同会長の益子修氏と握手するゴーン氏

18年間にわたって日産自動車を率いて来た、カルロス・ゴーン社長が

み、世界市場でグローバル企業として再させた功績は偉大だった。

一プロ統括に集中する。

リーダーシップ

001年同社社長兼CEO（最高経営責任者）にそれぞれ就任し、村山

退任する。
経営が悪化していた同社に乗り込
ルノーや三菱自との3社連合のグル

的な数値目標を掲げ、集中力を高め、早期の再建につなげた手法は有名だ。

「必達目標」を掲げ経営改革

げ、経営改革を進めた「ゴーン流経営」は、系列企業との馴れ合いを一切排し、大胆なリストラ断行となつて表れたため、「コストカッター」

今まで言われて恐れられた。

アレディイZ」を復活、電気自動車（EV）を他社に先がけ発進させたなど、日本のクルマづくりにその情熱を傾けた。

そんなゴーン氏の日産での足跡をたどると――。

2000年日産社長兼COO、2

ややもすると隨所で軋轢を生みが



環境・エネルギー問題の高まりを先取りしEV「リーフ」開発も推進

ちだが、確かな実績を残した姿は経営者として学ぶ点が多い。

ゴーン氏は、かつて「日本企業の社員は優秀だ。リーダーがふさわしい資質を身につければ、企業は生まれ変わること」を語った。思い切った改革に着手できている日本の経営者に聞かせたい言葉でもある。

仮のルノーを振り出しに、当時経営危機にあつた日産に乗り込み、経営再建策「日産リバイバルプラン」を策定。工場閉鎖など周囲が驚く大膽なリストラや徹底した経費削減を断行、當業利益率「4・5%以上」の目標を前倒しで達成して経営立て直しを図った。

トヨタを射程内に入れた。

3社連合はさらなる成長を目指して、「規模による競争優位性を享受させる」としている。

3社連合のトップとして棘腕

ゴーン氏の魅力は「一体どこにあるのか」。

ルノーから転身したばかりのゴーン氏に対して、日本の経営陣は全く異質のフランス人経営者として見なし、「得体の知れない外人経営者」「日本の企業風土に馴染めるかどうか」などの評価でスタート。

「日産はゴーン氏の就任で危険度を早めた」とまで酷評された時期もあった。

しかし、ムダと日本独特のしがらみを一切排し、欧米型経営者にある

直しを図った。

ただし、その徹底さゆえに「コストカッター」とも皮肉られたが、反面環境規制の厳格化なども話題を呼んだ。

2016年の日産・ルノー連合の世界販売台数は996万台に拡大、世界第3位の米ゼネラルモーターズに肉薄し、1000万台を超える独

のフォルクスワーゲン・グループ、

トヨタを射程内に入れた。

3社連合はさらなる成長を目指して、「規模による競争優位性を享受させる」としている。

超合理的な経営者としての存在感を強めていく。

当初、困惑したのは日産の労働組合でもあり、連合だつたに違いない。

ゴーン氏はリストラ敢行後、「鬼

の経営者」とまで酷評されたが、すぐさま手腕を発揮。業績のV字回復達成は就任後2年6ヶ月で成し遂げ

ており、経営陣からクローズアップされるようになつた。

まず第1に、そのカリスマ性だつた。

ゴーン氏は日産での権限を二部委

譲し、連合全体を見渡す立場で世界

V（電気自動車）という次世代技術の開発、部品の共通化などで、規模

拡大の効果が期待されている。

ゴーン氏は日産での権限を二部委譲し、連合全体を見渡す立場で世界市場における競争力の強化を図る。

「3社連合のトップを務めるゴーン氏のカリスマ性がどこまで発揮できるか。彼ならやるに違いない」（業界関係者）と期待を集めている。

社長を引き継ぐ西川廣人副会長は、「アライアンスに貢献していく」と強調している。

ゴーン氏の社長退任については、「会長は続けるので、日産の経営から完全に退くわけではない」（市場関係者）と、退任の報でやや反落した日産目の株価反応には冷靜だった。

いずれにしても、日産をV字回復させ、さらに3社連合へのゴーン氏の「ゴーン流経営」はこれからが見

これから日産社員に引き継がれて行くに違いない。

彼のリーダーシップは、日産、ルノ一、三菱自との提携には、社内でも

種々異論はあつたようだが、法令順守などを含めた意識改革は道半ばだ。しかし、ゴーン氏の取り組みは